

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.73 2011年9月号

「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」という本がベストセラーになりましたが、ドラッカーブームはまだまだ続いているようです。この本のもとになったのが、ドラッカーの「マネジメント【エッセンシャル版】」という本で、その本の中に、組織の「成長」に関する記述があります。

（組織の）「成長そのものを目標にすることはまちがいである。大きくなること自体に価値はない。よい企業になることが正しい目標である。成長そのものは虚栄でしかない。」

多くの会社が、「売上目標〇〇円！」や「シェア〇〇%！」といった数値目標をかかげて、日々、成長を目指してがんばっている状況を考えると、多少違和感を覚える考え方かもしれません。でも、そもそも何のために会社を成長させるのか、ということを見ると、ドラッカーの言うこともなるほどと思わせる部分があります。ドラッカーには多くの著作があって、私もそのほんの一部しか読んだことがないので、ドラッカーが実際にはどのように考えていたのかわかりません。ただ、ドラッカーに関する第一人者と言われる方によると、ドラッカーは結局のところ、組織や会社は人を幸せにするための手段あるいは道具にすぎないと考えていたようです。組織や会社は道具と考えれば、たしかに、道具そのものを立派にすることはあまり意味のないことかもしれません。重要なのは、その道具を使って何を成し遂げたいのか、ということであり、この場合、成し遂げるべき目標はひとつしかありません。それは、人を幸せにする、ということです。

一般的には、会社が成長すれば、そこで働く人たちにより多くの給料を払えるようになりますし、そこで働くこと自体を誇りに思えるようになるかもしれません。また、よい商品やサービスを提供する先（お客様）が増えれば、社会的な貢献度も上がっていくことでしょう。でも仮に、会社が成長することによって、働く人たちに無理な残業を強いることになったり、無理な成長を目指して商品やサービスの質が落ちることがあるとすれば、それは本来成し遂げるべき目標からはずれてしまうのかもしれませんが。会社が成長することによって、そこで働く人たちやお客様が本当に幸せになれるのか、という問いかけは、常に意識する必要がありそうです。

